

「第45回シナリオS1グランプリ」

部門番号①

「青と赤のエレジー」

笈川敏昭

【あらすじ】

松田英二（59）は、警備員の仕事をして一人で暮らしていた。ある日仕事中に倒れて救急車で搬送され、脳に悪性の腫瘍があり余命3か月と診断をされる。やり場のない気持ちで繁華街歩いていると佐藤ひかり（18）が男達に絡まれているので助けに行くが返り討ちに会ってしまふ。心身共に傷つき家で酒を飲んでいると、ひかりが訪ねて来て家族の借金の形にされ、闇金から逃げているので助けてほしいと言われ、今日だけの約束で泊める事にする。松田には17年前に事業に失敗して妻の松田亜希子（28）と、同じ名前の娘の松田日香里（1）と別れた過去があった。松田は現在も亜希子に細々と送金をしていた。余命3か月の自分に出来る事は何かないか考えた末、元共同経営者の金谷孝蔵（65）や家族に改めて謝罪に行く決意をする。ひかりには自分は暫く家を空けるのでここに居ていいと伝える。17年ぶりに金谷に会って謝罪

をして現状を伝えると直ぐに家族に会いに行くよう言われて会いに行くが、亜希子からは現在幸せに暮らしているので自分達は大丈夫だから、送金されたお金は松田のために使つてほしいと全額返されてしまう。娘の日香里とも話す事も出来ずに17年間の全てが否定された気持ちになり、失意の中帰宅すると意識を無くし病院に搬送されてしまう。ひかりは医師から松田の病状を聞かされ松田の娘と偽り最期を看取る決意をする。一時退院で家に帰ると闇金業者に見つかってしまったが、松田が亜希子から返されたお金で借金を返しひかりを自由の身にする。松田は最後を覚悟し、ひかりと一緒に昔家族と約束をしたスカイツリーに行き息を引き取る。ひかりは遺影と帰宅し、松田に最後に言われた鞆の中を見ると宝くじの外れ券と日香里が受取人の300万円の保険証券があった。亜希子は松田の意志を酌み、ひかりに保険金を渡し、新しい一歩を踏み出せるようにしていく。(776文字)

【登場人物表】

- 松田英二（42）（59）：警備員
- 佐藤ひかり（18）：家出娘
- 松田（河村）亜希子（28）（45）  
：松田の元妻
- 松田（河村）日香里（1）（18）  
：松田の子供
- 河村麗（6）：亜希子の子供
- 金谷孝蔵（48）（65）：松田の元相棒
- 河野登志夫（42）（59）：松田の会社同僚
- 村松海斗（25）：松田の会社同僚
- 新井隆二（22）：闇金の借金取り
- 門脇達郎（45）：闇金の借金取り
- 小泉まどか（18）：ひかりの友達
- 森永渉（21）：まどかの友達
- 桜田佑介（22）：まどかの友達
- 鈴木孝蔵（65）：医者

○ 駅前のビルの工事現場

炎天下、トラックが行き来している。

警備員の制服で松田英二（59）が、

村松海斗（25）と汗だくで、トラッ

クを工事現場に誘導している。

松田が空を見上げると倒れる。

村松トラックを止めて松田に駆け寄る。

村松「大丈夫ですか！ 誰か救急車だ！」

河野登志夫（59）も駆け寄る。

河野「熱中症か、誰か冷たい物持ってこい！」

救急車のサイレンが聞こえてくる。

1

○ 駅構内・ホーム

電車の扉が閉まるベルがなっている。

佐藤ひかり（18）、電車に掛け乗る。

電車の扉が閉まり走り出す。

新井隆二（22）、門脇達郎（45）、

階段を駆け上がって来る。

○ 電車の中

ひかり、ホームの新井と門脇を見る。  
新井と門脇、ひかりに気が付いてホーム走るが電車が行ってしまふ。

○病室（夕）

松田、奥のベッドに寄り掛かり、河野、  
村松と談笑をしている。

村松「いや、でも元気そうでしたですよ」

河野「本当だよ、もう駄目かと思ったよ」

松田「俺もマジでやばいと思った」

村松「年なんだから無理しないでくださいよ」

松田「うるせい！ こっちは生活がかかって  
いるんだから、やるしかないんだよ！」

河野「そんなに元気なのに退院できないの？」

松田「そうなんだよ、念のため検査するから

1日入院しとけて医者言うんだ」

村松「大丈夫なんですか？」

松田「大丈夫だろ、脅かすなよ」

河野「ゆっくり休んで、現場に戻って来いよ」

河野、村松立ち上がり、

河野「じゃ、俺達行くわ、お大事に」

松田「ありがとうな」

○病院・検査室（朝）

松田、CTスキャン検査を行っている。

○診察室

鈴木孝蔵（65）がPCで脳の画像を  
見ている。

鈴木「松田さんにはご家族は？」

松田「いません、独り身です」

鈴木「では家族以外で親しい方はいますか？」

松田「そう言われるといたないですね」

鈴木困った表情でPCを見る。

鈴木「松田さん、これから話す事を冷静に聞

いてくださいね」

松田「え、はい？」

○繁華街（夜）

松田が人込みの中を呆然と歩いている。

鈴木の声「検査の結果ですが、松田さんの脳に悪性の腫瘍が見つかりました」

松田、人にぶつかり睨まれるが、無視をして歩いていく。

鈴木の声「この腫瘍は徐々に大きくなっていくのですが、脳の奥にあるので手術で除去する事が難しいのです」

松田の声「それって、どういう事ですか？」

松田、店の前で新井と門脇に絡まれて困っているひかりを見る。

鈴木の声「申し上げづらいのですが、このままですと圧迫された血管が脳内で破裂する可能性が高いです」

松田、ひかりに小走りで向かっていく。

松田の声「先生、それって、俺死んじゃうの？」

松田が、新井と門脇を遮りひかりの間に割って入る。

鈴木の声「100%ではないですが、仮に破裂したらそうなる可能性が高いです」

松田、新井との睨み合いになる。



新井「てめえ、どういうつもりだ！」

松田「困っているじゃないか、やめなさい」

門脇「正義の味方かよ、自分が何しているの  
か分かっているんだろぅな？」

松田、新井に殴られ崩れ落ちる。

松田の声「先生、俺はどうすれば？」

松田、ひかりに逃げると合図する。

ひかり、一瞬ひるむが逃げていく。

新井、ひかりを追いかけようとするが、

松田が飛びついて止める。

鈴木の声「進行を抑える薬を出しますので、

まずそれを飲んで様子を見ていきましょう」

警官が駆けつけると二人逃げ去る。

松田、警官に取り押さえられる。

### ○繁華街・外れ（夜）

松田の声「どんな症状が出るんですか？」

松田、警官に説明をしている。

### ○住宅街（夜）

鈴木の声「激しい頭痛、吐き気、倦怠感から始まり、記憶障害や意識障害が出てきます」

松田、住宅街をふらふらと歩いている。

○松田のアパート・外・全景（夜）

部屋の窓に明かりが灯る。

○同・6畳一間の部屋の中（夜）

松田が傷を押さえて酒を飲んでいる。

棚に東京タワーの前で笑みを浮かべる

松田英二（42）と松田亜希子（28）、

松田日香里（1）の写真が飾ってある。

玄関の扉にノック音がする。

松田、驚いた表情で玄関まで行く。

松田「誰？」

返事はないので扉の覗き穴から見ると

松田扉を開けるとひかりが立っている。

松田「どうして？」

ひかり「行くところがないから泊めて」

松田「つけて来たのか？」

ひかり「うん」

松田「俺が危ない人かもしれないんだぞ」

ひかり「おじさん、正義の味方でしょ？」

松田「まいったな、未成年だろ？」

ひかり、手を合わせて上目づかいで、

ひかり「今晚だけでいいから、お願い」

松田「とりあえず入れよ」

ひかり、部屋の中を見渡す。

ひかり「寂しい暮らしだね」

松田「うるさい、お前に言われたくないわ」

ひかり笑顔を見せて壁際に座る。

ひかり「傷痛くない？」

松田「大丈夫だよ、俺は松田、名前は？」

ひかり「ひかり」

松田、一瞬棚の写真を見て、

松田「ひかりって言うのか？」

ひかりも棚の写真を見る。

ひかり「どうしたのよ？ 普通の名前でしょ」

松田「あっ、ごめん、そうだよな」

ひかり「その写真の子、ひかりって言うの？」

松田、気まずそうな表情をする。

ひかり「奥さんに捨てられたの？」

松田「うるさい！」

ひかり「御免、私も親に捨てられた口だから」

松田「親に捨てられた？」

ひかり「すいません、黙秘します」

松田「いくつなんだ？」

ひかり「18歳だけだ」

松田「事情があるのは分かるけど、せめて理

由ぐらいは言えよ」

ひかり、上着のボタンを外し始める。

松田「おい、よせ、何しているんだよ！」

上着を開くと体のあちこちに痣がある。

ひかり「私には行くところが無いの」

松田、呆然と見ている。

ひかり、両手で上着を隠して、

ひかり「私、親に風俗に売られたの、で、あ

の男達は闇金の取り立て屋なの」

松田「お前未成年だろ？」

ひかり「でも、追われているの」

松田「それって児童相談所とかに行った方が  
良いだろ？」

ひかり「行っても無駄、誰も信用出来ない」

松田「だけどさ」

ひかり「泊めてくれないと警察に駆込むよ！」

松田「脅迫かよ」

ひかり、お腹がなり恥ずかしい表情。

松田、笑みを浮かべる。

松田「インスタントだけドラーメン食うか？」

ひかり「やった！」

松田立ち上がり鍋に水を入れる。

ひかり、松田の背中を見ている。

○松田のアパート・部屋の中（夜）

二人、離れて布団に横になっている。

ひかり「おじさんは何をしている人なの？」

松田「工事現場の警備員」

ひかり「ああ、工事現場に立っている人ね」

松田「立っているだけじゃなく、事故を起こ

さないために必要な交通誘導の仕事だ」

ひかり「でも大半立っているよね」

松田「そうだけど世の中の役に立っているぞ」

ひかり「むきにならないでも分かっているよ、

誰かがやらないといけない仕事でしょ」

松田「そうだ」

ひかり「どうして助けてくれたの？」

松田「うーん、むしゃくしゃしていたから、

なれない事をしてしまった」

ひかり「いつも正義の味方じゃないんだ」

松田「当たり前だよ、あんな事毎回できないよ」

ひかり「何にむしゃくしゃしていたの？」

松田「うーん、何だったかな、忘れた」

松田とひかり目が合う。

松田「本当に行くところ無いか？」

ひかり「お休みなさい！」

二人背を向けているが目は開いている。

○フラッシュ・松田の会社・事務所内（夜）

T・17年前松田英二（42）と金谷

孝蔵（48）が腕を組んで座っている。

時計は11時45分を指している。

電話が鳴ると松田が慌て電話を取る。

松田「もしもし、どうだ！ 大丈夫そうか？」

金谷、心配そうに見ている。

松田「そうか」

松田、肩を落とし受話器を置く。

金谷「万事休すか」

松田「あと15分じゃどうにもならないよな」

金谷、松田に掴みかかり、

金谷「で、どうするつもりなんだ！」

松田、金庫に残っている200万円を

出して金谷に渡す。

松田「すまん、これしかないがこれで何とか」

金谷「ふざけるな、俺は一億円の保証人だぞ、

こんなはした金でどうしろって言うんだ！」

松田「しかし金はこれしかないんだよ！」

金谷「開き直るのか、だから俺は止めとけっ

て行ったんじゃないか、それをお前が」

金谷、松田を睨みつける。

時計12時を回ると電話が鳴り始める。

金谷 「もう二度と会う事は無いと思うが」

金谷、松田を睨みつけ、200万円を  
掴んで事務所から出て行く。

松田も鳴り続ける電話を見ながら、事  
務所を出て行く。

○フラッシュ・松田家・リビング内（夜）

テーブルの上には松田の名前が入った  
離婚届が置いてある。

亜希子（28）、鞆に荷物を入れている。

松田、座ってその様子を見ている。

亜希子 「もっと早く言ってほしかった」

松田 「本当にすまない」

亜希子 「散々好きな事してこのありさま？」

日香里（1）、ソファで寝ている。

松田 「良いから話はあとだ、お前達は早く実  
家に帰りなさい、で、着いたらすぐに離婚

届を出すんだぞ、分かっているな？」

亜希子 「分かっているけど、本当に良いの？」

松田 「そうしないと、お前達にも迷惑がかか



るんだ、分かってくれ！」

亜希子「貴方は大丈夫なの？」

棚の上には、東京タワーの前で、松田、

亜希子、日香里の3人の笑顔の写真。

松田「俺は大丈夫だから、必ずまた迎えに行くから、とにかく早く行くんだ！」

時計午前2時を過ぎている。

亜希子、日香里を抱えて出て行く。

○フラッシュ・ビルの屋上（早朝）

松田、塀に手を掛けて下を見ている。

屋上の扉が開き、警備の河野登志夫（4

2）が走って来て松田を抱きかかえる。

松田暴れるが、河野は離さない。

東の空から朝日が昇って来る。

○松田のアパート・部屋の中（朝）

窓から朝日が入って来る。

台所でひかりが料理をしている。

松田、ひかりの後姿を見ながら起きる。

ひかり「おはよう！」

松田「あ、ああ」

ひかり「あるもので朝ごはん作った」

ひかりが食卓にご飯、味噌汁、目玉焼きを運んでくる。

松田、ひかりを見ている。

× × ×

二人、黙々とご飯を食べている。

松田「この味噌汁、美味しいな」

ひかり「よかった、私いつもご飯作らされていたから料理は自信あるのよね」

松田「そうか」

ひかり「ご飯食べたら出て行くからね」

松田、手を止めてひかりを見る。

ひかりも松田を見る。

松田「俺、昔の知人に会いに行くんで、暫く家を空けるから、その間此処にいていいよ」

ひかり「まじで？ やっぱ正義の味方じゃん」

松田「違うんだ、前から考えていた事なんだ」

ひかり「なら、お言葉に甘えちゃう、やった！」

ひかり、流し台で洗い物をしている。

松田、流し台に行き財布から3万円を出し、鍵と一緒にひかりに渡す。

ひかり「えっ」

松田「何もないけど、部屋の中はいじるなよ」

ひかり、鍵とお金を見ながら、

ひかり「何か付き合っているみたいだね」

松田「冗談はやめろよ、いいか、誰か来たら娘だっていうんだぞ」

ひかり「わかった、ばれたらおじさんが捕まっちゃうものね」

松田「頼むぞ、本当に」

ひかり「その知人って昔の奥さん？」

松田「誰だっていいだろ！」

ひかり「仲直りできるといいね」

松田「うるさい！」

ひかり「何かあったらメールか電話頂戴、慰めてあげるから」

松田「小娘にそんな事頼むか！」

ひかり「早く帰って来てね」

松田「早く帰って来ると、居る処無くなるぞ」  
ひかり「あっ、じゃ、帰って来ないで」

松田「でたよ、いいから戸締り気をつけるよ」  
ひかり「はーい！」

ひかり、閉まった玄関の扉を見ている。

### ○電車の中

松田、4人席の窓際に一人座っている。  
車窓から田畑が見えている。

松田、メールで「検査の結果が良くなかったのでしたら早く休ましてください」と打ち込んで、会社に送信している。  
車窓から住宅街、工場が見えて来る。

アナウンス「次は宇都宮になります」  
松田、荷物を持って立ち上がる。

### ○広い敷地の工場・入口・全景（夕）

仕事の昼夜交代で大勢の工員達が行き来している。

仕事帰りの金谷（65）も歩いている。

○公営団地・金谷家・全景（夕）

松田、1階玄関の扉をノックするが返事が無い為、辺りを見渡す。

○同・入口前（夜）

松田、手前の階段に座っている。

金谷、食材の入ったビニール袋を持って歩いて来る。

松田、金谷に気が付いて立ち上がる。

金谷も松田に気付き立ち止まる。

松田「金谷、久しぶりだな」

金谷「久しぶりだと、どの面下げて此処にいるんだ！」

松田「元気そうでよかった」

金谷「どういうつもりなんだ！」

松田「何か急に会いたくなって」

金谷、松田の胸倉を掴みながら、

金谷「てめえのせいで、俺が全てを失ったのは覚えているよな、今更何のつもりだ！」

金谷、松田を突き飛ばし玄関に向かっ

て歩いて行く。

松田立ち上がりながら、

松田「折角来たんだから一杯飲もうよ」

金谷少し呆れた表情で、

金谷「相変わらずだよな」

松田「良かった、奮発してお前の好きな『山

崎』買って来たぞ」

金谷「部屋散らかっているけど」

金谷、松田を部屋に入れる。

○同・部屋の中（夜）

台所4畳半、奥は6畳の部屋に布団が

敷かれ横には食卓が置いてある。

松田、部屋の中を見渡しながら、

松田「俺ん家より広いな」

金谷「お前が、俺より良い家に住んでいたら、

許さないよ」

金谷、グラスと缶詰をテーブルに置く。

松田、山崎の蓋を開けてグラスに注ぐ。

○フラッシュ・高級クラブ・ラウンジ内（夜）

テーブルに若いホステス達、松田と金谷がはしゃぎながら飲んでいる。

テーブルには、山崎のボトル、アイスペール、フルーツが置いてある。

金谷が美味そうに山崎を飲んでいる。

○公営団地・金谷家・部屋の中（夜）

松田、金谷を見ている。

金谷、注ぎ終わるとグラスを手にして  
味わいながら飲み始める。

松田「おいおい、乾杯なしでいきなりかよ」

金谷「どうしてお前と乾杯するんだ」

松田「17年ぶりだぞ、寂しいじゃないか」

金谷「やっぱり山崎は美味いな」

松田「でも良かったよ、喜んでくれて」

金谷「で、何しに来たんだ、罪滅ぼしに金でも持ってきたのか？ まさか17年ぶりに

来て山崎だけって事は無いよな」

松田「ごめん、金は持ってきてない」

金谷「ふっ、そりゃそうだよな」

松田「もう65だろ、元気か心配になってさ」

金谷「お陰様で体だけは元気だよ」

松田「確かに健康が一番だよな」

金谷「もしかして、何処か悪いのか？」

松田「違うよ、このとおり元気だよ、昔ばなしでもできればと思ってさ」

金谷「昔話だと、ふざけるな、俺にとってはまだ続いている今の話だ、山崎ごときで水に流せると思うなよ」

松田「そんな事は分っているよ」

金谷「でもお前に話したい事があるなら聞いてやっても良いぞ、山崎の酒代として」

松田「相変わらず優しいな」

金谷「お前は許せないけど、山崎に罪はないからな」

金谷、一気にグラスの山崎を飲み干す。

○松田のアパート・全景（夜）

男女の笑い声が聞こえる。



○同・部屋の中（夜）

ひかり、小泉まどか（18）、森永渉（21）、桜田佑介（22）が飲んでいる。

ひかり、小声でまどかに耳打ちして、

ひかり「どうしてこんなの連れて来たのよ」

まどか「いや、流れでさあ、ごめんね」

ひかり「此処はさあ、人の家だよ、困るよ」

森永「その親父、ひかりに気があるんだろ」

ひかり「そんなんじゃないよ！」

まどか「そんな訳ないよ、ボロいアパートだ  
けど好きに使って良いって絶対下心あるよ」

桜田「だよな、ちよっと部屋の中探索しよう

ぜ、何か出てくるかもしれないぞ」

ひかり「やめてよ、それは良くないよ！」

森永「本当に良い人か調べるだけだよ」

桜田「そうだよ、こういう家に住んでいて実

は金持っているなんて事もあるからさ」

まどか「まじか、お金あったらいたただきだね！」

ひかり止めようとするが遮られる。

森永、桜田が部屋の中を漁り始める。

押入れの中から、過去17年分の外れの宝くじが輪ゴムで束ねられ出てくる。

桜田「笑える、すげえよ、これ」

森永「これ、毎週1枚だけ買っているんだ、何か執念を感じて怖いな！」

まどか「きもいわ！」

ひかり、その宝くじを見ている。

桜田「あっ、これだけ来週発表だ」

森永「当たったりしてな」

桜田「一枚買っただけで当たる訳ないだろ」

森永「でも毎週一枚買い続けて、このしょぼい生活から抜け出したいって、寂しい人生だな！ あはははっ、クソだなこいつ！」

ひかりその一枚を森永から取り上げる。

森永「何だよ、マジになるなよ！」

ひかり「もうやめて、出て行って！」

森永、ひかりに向かうがまどかが遮る。

まどか「ひかり、どうしたのよ！」

ひかり「御免、こいつら連れて出て行って！」

まどか「ひかり、こんな親父に気があんの？」

ひかり「ちがう、そんなんじゃない、けど」

桜田「何だよ、まどかに言われたから来たけ

どふざけるなよ、言われなくてもこんな所

出て行くよ、まどか行くぞ！」

まどか「えっ、えっ」

森永「まどかが友達紹介するって聞いたから

来たのに、つまんねえの！」

まどか、桜田、森永について行く。

まどか「御免、また連絡するね」

ひかり「うん、御免ね」

まどか達、出て行き玄関が閉まる。

ひかりの母の声「ひかり、この宝くじが当た

るとこんな生活から抜け出せるよ」

ひかり、宝くじを1枚持って玄関の前

で立っている。

○公営団地・金谷家・部屋の中（夜）

金谷、松田を見て、

金谷「お前今何しているんだ？」

松田「警備員の仕事だよ」

金谷 「俺は工場のラインの仕事で毎日お弁当  
におかずを入れている」

松田 「そうか、俺は毎日工事現場に立ってト  
ラックと市民の誘導だ」

金谷 「会社が不渡り出して、俺とお前の家族  
はバラバラ、残った借金を返しながら、安  
酒のんで寝るだけの生活だ！」

松田 「本当にすまないと思っている」

金谷 「今の俺の一発逆転は毎週1枚だけ買っ  
ている宝くじだけだ！」

松田、笑みを浮かべ見ている。

松田 「そうか、楽しみがあって良いな」

金谷 「うるせい、馬鹿にしているんだろ、で  
もどうして今頃来たんだよ！」

松田、下を向いている。

金谷 「何も無かったら来ないだろ？」

松田 「実は娘に会いたいんだ」

金谷 「俺も息子に会いたいよ」

松田 「金谷も息子に会ってないのか？」

金谷 「お前と同じで会えないだろ！」

松田「一目だけでも良いんだけどな」

金谷「なら会いに行けばいいだろう」

松田「でもな、金もないし、何もできないのに、どの面下げて会いに行けるんだよ？」

金谷「実は俺、10年前に居てもたってもいられなくなって、息子の家まで行ったんだ」

松田「で、どうした？」

金谷「息子が家に入るところを見て帰って来た」

松田「会わなかったのか？」

金谷「一目、見られたからそれで良しとした」

松田「それで良かったのか？」

金谷「かみさんは再婚していたし、俺が行ってまたこじらせてもな、全部俺のせいだし」

松田「聡子さん再婚したんだ？」

金谷「最初は借金返して迎えに行くとか、もう一山当てるとか、息巻いていたけどな」

松田「亜希子も再婚したみたいなんだ」

金谷「そうか、女は俺達よりしぶといな」

松田「そうだな」

金谷「お互いどうしようもねえな」

松田「（苦笑い）確かにどうしようもない」

金谷「で、どうしてそんな急に会いたくなるんだ？ いい加減話せよ、このままだと山崎一本空くぞ」

松田、一口山崎を呑んで金谷を見る。

松田「実は、いや」

金谷、松田の胸倉を掴み、

金谷「お前はいつもそうだ、あの時もそうだ、何も言わないで突然結果を言うだけ」

松田「確かにそうだな」

金谷「松田、俺達が会社をつぶしたんだぞ、お前だけのせいじゃない、ただ俺が許せなかったのは、お前のそう言うところだ」

松田、山崎を一気に飲み干す。

松田「実は俺、あと3か月ちよつとで死んじやうみたいなんだ」

金谷「ふっ、こんな時冗談はよせ！」

松田「本当なんだ、だからやり残した事を終わらせてから逝きたいと思ってここに来た」

金谷「ほ、本当なのか？」

松田「ああ、脳に悪性の腫瘍があるんだって」

金谷「手術できないのか？」

松田「場所的に手術は無理だって言われた、

そもそもそんな金もないし」

金谷「それで会いたいのか」

松田「ああ」

金谷「でも、元氣そうじゃないか？」

松田「これから徐々に悪くなるそうだ」

金谷「お前、いきなり言われても」

松田「今までずっと一人でやってきたのに、

急に人恋しくなるなんて、情けないな」

金谷「おい、こんな所で何をしているんだよ」

松田「えっ」

金谷「お前が行く所は此処じゃないだろ！」

松田「けど、いまさら会っても」

金谷「良いから、明日の朝一番で行けよな！」

金谷が睨む。松田が金谷を見る。

松田「分かったよ、今日はとことん飲むか」

松田と金谷、小さく乾杯する。

○松田のアパート・部屋の中（夜）

ひかり、束ねた外れ券の裏を見ると、

「今度こそ、いつか、一発逆転！」と

赤いマジックで書いてある。

ひかり「馬鹿だよな、逆転なんかないのに」

引き出しを開けると通帳が入っている。

通帳をめくると毎月25日に「マツダ

アキコ」宛に5万円を入金している。

口座の残金は20万円入っている。

引き出しの中に通帳をしまう。

突然、玄関の扉がノックされる。

ひかり立ち上がり扉を開ける。

○同・玄関前（夜）

ひかり「いい加減にしてよね、警察呼ぶわよ！」

河野と村松が驚いて立っている。

ひかり「えっ、ごめんなさい、人違いでした」

河野「えっ、あれ、松田さんの家ですよね？」

ひかり、気まずそうな表情で、

ひかり「あ、はい、」



村松「え、もしかして、松田さんの娘さん？」

ひかり「あ、そ、そうです！　いつも父がお

世話になっております」

河野「見舞いに来ただけじゃないの？」

ひかり「えっ、わ、えっと、そう、そうです、

急遽今日から検査入院になってしまっ

河野「そうなんだ、大丈夫なの？　仕事は良

いからしつかり治せて言っておいてよ！

ひかり「は、はい、伝えておきます」

村松が酒と乾き物が入った袋を渡す。

村松「つまらないものだけど、お見舞い！」

ひかり「ありがとうございます、帰ってきた

ら渡しておきますね」

河野、村松帰って行く。

ひかり、扉を閉めて、ほっと息をつく。

ひかり「おじさん病気だったの？」

○田園都市線・沿線の駅前・改札口（朝）

松田、改札口から出て来る。

○住宅街（朝）

松田、閑静な住宅街を歩いている。

○河村家・全景（朝）

3階建ての豪邸が立っている。

松田が辺りを気にしながら近づく。

河村正人、亜希子、日香里、麗の名前が入っている表札を見る。

○公園

松田がベンチに座っている。

子供達とママ達が遊んでいる。

河村亜希子（45）と河村麗（6）が公園前の道を歩いている。

亜希子、松田を見て立ち止まるが直ぐに歩き出す。

×

×

×

夕方になり子供達とママ達が公園から帰って行く。

松田、ベンチに座り何か気配を感じる。

亜希子が松田を見下ろしている。

松田「亜希子」

亜希子「こんなところで何しているのよ」

松田「いや、たまたま」

亜希子「そんな訳ないでしょ、昼前からここに  
いるでしょ、まさかこの時間迄いないと  
思つて来てみたら、まだいるし」

松田「ごめん、ここに居たら会えるかなと思  
つて、ずるずるといた」

亜希子「17年よ、今更何しに来たのよ！」

松田「亜希子も元氣そうで良かった、でも良  
い家に住んでいるな」

亜希子「家に来たの？」

松田「家の前で帰ったから安心しろよ」

亜希子「なによ、いきなり人の家の前まで来  
て何が安心しろよ、馬鹿じゃないの！」

松田「そんな言い方ないだろ」

亜希子「またお金に困っているんでしょ？」

松田「違うよ、金はないけど困っていないよ」

亜希子、鞆から松田英二名義の通帳を

取り出して松田に渡す。

松田「なんだよ、これ？ 俺名義？」

松田が中を見ると、亜希子から松田の通帳に毎月5万円ずつ入金されていて、総額1020万円が入っている。

亜希子「私、10年前に再婚したの、女の子も生まれて今6歳、もちろん日香里も18歳になって元気にしているわ」

松田「人づてに聞いて知っていた」

亜希子「それなのに毎月5万円を1日も送れずに17年間送金してくれたのは感謝しているわ、でも私達は大丈夫だから、このお金は貴方のために使ってほしいの、元は貴方のお金なんだから受け取って」

松田、亜希子を見る。

松田「もらえないよ、たった5万円だけど、俺にとって日香里と繋がっている証なんだ」

亜希子「気持ちは嬉しいけど、私は貴方に、もう一度頑張ってほしいのよ、このお金をやり直すきっかけに使ってほしいの、貴方

にも、もう一度幸せになってほしいの」

松田「もう遅いんだよ、俺には、もう」

亜希子「何言っているのよ、今の時代59歳なんてまだまだ十分現役よ」

亜希子の後ろに河村日香里（18）が立っている。

日香里「お母さん、この人だれ？」

亜希子、松田、驚いた表情をする。

亜希子「あっ、驚かさないでよ、この人は麗のお友達のお父さんで、えっと、杉田さん」

日香里「はじめまして、日香里です、いつも母がお世話になっております」

松田、日香里を見ている。

松田「ああ、日香里ちゃんって言うんだ、こちらこそよろしくお願いします」

亜希子「それじゃ、杉田さん、私もう夕飯の支度があるので行きますね」

松田「あ、はい、それじゃ」

亜希子と日香里歩いて帰って行く。

松田、通帳を手にして亜希子と日香里

の後姿を見ている。

○松田のアパート・部屋の中（夜）

ひかり、横になりスマホを見ている。

玄関の扉がノックされる。

ひかり「だれ？」

松田「あ、あけてくれ」

ひかり、慌てて扉を開ける。

松田が頭を抱えて倒れている。

ひかり、松田に駆け寄る。

○同・アパート前・全景（夜）

救急車が止まっている。

救急救命士がストレッチャーで松田を

救急車に運んで行く。

ひかり、松田に付き添っていく。

○病院・全景（夜）

○同・病室（早朝）

松田、点滴をされベッドに寝ている。  
脳波計、心電図が作動している。  
ひかりがベッドの横に座っている。

○診察室（朝）

鈴木が、ひかりと向き合っている。

鈴木、P Cで松田の脳の写真、診断デ  
ータを見ている。

ひかり、鈴木を見ている。

鈴木「失礼ですが、松田さんとのご関係は？」

ひかり「私の父です」

鈴木「松田さんは確かご家族はいないと言っ  
ていましたが？」

ひかり「違います、母と父が離婚をせず  
と離れ離れだったので、先日から父の  
事が心配になり一緒に住み始めました」

鈴木「そうなんですか」

ひかり「はい、父の病気はどうなんですか？」

鈴木「何も聞いていないのですか？」

ひかり「はい、父は何も言わないので」

鈴木「そうですか」

ひかり「どこが悪いんですか？」

鈴木「先程再検査をしましたがお父さんの脳には悪性の腫瘍ができていて、前回よりもかなり症状が進んでおります」

ひかり「えっ」

鈴木「現代医療では、有効な治療法はないので、投薬を色々試しながら様子を見て行きましょうと伝えておりましたが」

ひかり「そんな酷いんですか？ 手術とか何か打つ手はないのですか？」

鈴木「ここまで腫瘍が大きくなると、手術は難しく、なすすべがありません」

ひかり「どうなって行くんですか？」

鈴木「頭痛、部分的な麻痺、意識障害等が発生して、腫瘍に圧迫された血管がある日突然に、破裂してしまう可能性が高いです」

ひかり「破裂するとどうなるんですか？」

鈴木「そのまま意識を無くします、その後は」

ひかり、先生を見ている。



鈴木「ですからできる限り、ご本人の希望を聞いてあげてください」

ひかり「あとどのくらい？」

鈴木「分かりませんが、明日か、一週間か、それより長いかな」

ひかり、P Cの脳の写真を見ている。

### ○病室（夕）

松田ベッドで寝ている。

医療機器は取り外されている。

ひかりがベッド脇に座っている。

松田、目が覚めてひかりを見る。

松田「えっ」

ひかり「大丈夫？」

松田、頭を押さえながら、

松田「あつ、俺どうしてここにいるの？」

ひかり「覚えていないの？ 家に帰ってきたら急に頭が痛いって、そのまま意識を無くしたから救急車で病院に来たのよ」

松田、窓の外を見ながら、

松田「そうか、迷惑かけたな、でも俺はもう大丈夫だから帰っていいよ」

ひかり「先生から病気の事聞いたよ」

松田「えっ」

ひかり「そんなに悪いのに一人で出かけるなんて、無茶して」

松田「昔迷惑をかけた人達に最後にちゃんと謝りたかったんだ」

ひかり「それって、懺悔の旅のつもり？」

松田「でも遅かったかな」

ひかり「遅かったって何がよ！」

松田「やっぱ、時間は取り戻せないよな」

ひかり「もう、おじさんの話まどろっこしい、で、娘の日香里に会えたの？」

松田、少したじろいで、

松田「会えたけど」

ひかり「けど？」

松田「友達のお父さんとして少しだけ会えた」  
ひかり「意味が分からないよ、友達のお父さんとして会ってどうするのよ？」

松田「俺が良いんだからそれで良いだろ、もう帰っていいよ！」

ひかり「娘の日香里に会いたいんでしょ？」

松田「その話はもういいから」

ひかり「最後にちゃんと会いたいんでしょ？」

松田「俺、もう寝るから帰ってくれ」

松田、布団をかぶって背を向ける。

ひかり、松田の背中を見ている。

○松田のアパート・部屋の中（夜）

ひかり、押入れの中を漁っている。

郵便物や、書類などを見ている。

ひかり「あっ、これかな」

ひかり、亜希子の住所が記載された封筒を見ている。

○河村家・玄関前

ひかり、表札を確認して目の前にある公園に歩いて行く。

○公園・全景（夕）

ひかりベンチに座り河村家を見ている。  
ママ友と子供達、笑顔で遊んでいる。

日香里が自宅の門を開けている。

ひかり立ち上がり日香里の処に向かう。

○河村家・門前（夕）

ひかりが小走りで日香里に声をかける。

ひかりの声「ちよっと待って！」

日香里が振り返る。

ひかり息を切らし、日香里の前に立つ。

ひかり「日香里さん？」

日香里「えっ」

ひかり「少し話したいの、時間ある？」

日香里「アンタ、誰なの？」

ひかり「松田英二の娘よ」

日香里「え、えっ」

○公園（夕）

ひかりと日香里、ベンチに座っている。

ひかり「突然、驚かせてごめんなさい」

日香里「アンタ、名前は？」

ひかり「貴方と同じひかりで、年も同じよ」

日香里「ふうん、同じ名前なんだ、お父さんの娘って、どういう事？」

ひかり「御免、娘じゃないの、実は私、貴方のお父さんに助けてもらって、そのお札に何かしたくてここに来たの」

日香里「どうして自分で来ないのよ」

ひかり「会いには来たみたいよ、この前貴方に偶然に会えたって言っていたから」

日香里「ああ、やっぱあの時のおじさんか」

ひかり「へえ、分かるんだ、やっぱ血のつながりは凄いな」

日香里「でも、また会う気はないけどね」

ひかり「会ってほしいの、今体を壊している」

日香里「散々好き勝手した報いよね」

ひかり「そんな言い方はないでしょ！」

日香里「アンタに言われる筋合いないわ、私達がどれだけ苦労したか分かっているの？」

ひかり「分からないけど、想像はつくわ」

日香里「今更父親面されても困るわ」

ひかり「そういうつもりは無いと思うけど」

日香里「会っても話す事無いし、会ったら文句言ってお互い嫌な気持ちになるだけだよ」

ひかり「そんな事言わないで、私の親なんか本当に糞で、まじで、糞野郎で、だから」

日香里、ひかりを見ている。

ひかり「何か、貴方のお父さん可哀想でね」

日香里「アンタお父さんと一緒にいるの？」

ひかり「うん、でも変な関係じゃないから安心して、ならここに来ないし」

日香里「そんな事興味ないし、好きにすれば」

ひかり「私が言えた義理じゃないんだけど、もう一度会ってあげてくれないかな？」

日香里「無理、絶対に無理！」

ひかり「少しで良いから話してあげてよ」

日香里「アイツと別れてからの、お母さんとの苦労話でもしろって、言うの？」

ひかり「でも、今は幸せそうだよね？」

日香里「だから何、アンタに何が分かるの！」  
ひかり「分かるわよ、少なくとも貴方の親は、  
借金の形に娘を風俗に売ろうとはしなかつ  
たでしょ？」

日香里「えっ、何の話し？」

ひかり「私、闇金の連中に風俗に連れていか  
れる所で貴方のお父さんに助けられたの」

日香里、引き攣った表情で、

日香里「へえ、その恩返しってこと？」

ひかり「そう、だから私が勝手に来ている」

日香里「でも、私は会わないよ、私よりアン  
タがそばにいてあげればいいでしょ」

ひかり「だから、私じゃダメなのよ、私本当  
の娘じゃないし、貴方と名前が一緒ってだ  
けで、優しくして貰っているだけだから」

日香里「でも会わない、お父さんの事はアン  
タに任すわ、その方が良い気がするから」  
ひかり「良い気がするって何よ！ 分かった  
わよ、もういい、後悔しても知らないから！」

日香里「後悔って言われても、私にはもうい

なかった人だから」

ひかり、日香里を睨みつけ、

ひかり「自分の事情ばかり言いやがって、ただ会うだけじゃん、そんな事も出来ないのかよ！」

ひかり、ベンチから立ち、歩き出す。

日香里、一瞬止めようとするがやめる。

日香里、ひかりが見えなくなると、立

ち上がり家に向かって歩いて行く。

#### ○電車の中（夜）

ひかり席に座り窓の外の月を見ている。

#### ○河村家・日香里の部屋の中（夜）

日香里、ベッドに横たわり窓の外の月を見ている。

#### ○病院内・大部屋の病室

松田ベッドに寄り掛かり外を見ている。

ひかり、松田のベッドに近づいていく。



ひかり「体調良さそうだね」

松田、ひかりを見る。

松田「もう来るなって言っただろ」

ひかり「私の勝手なんだからいいじゃない」

松田「俺みたいな古い先短いのに関わってい

ちやだめだよ」

ひかり「他に行くところないしさ」

松田、笑みを浮かべひかりを見る。

松田「此処じゃ何だから、屋上でも行くか」

ひかり「歩けるの？」

松田「馬鹿にするなよ、大丈夫だよ」

松田ベッドから立ち上がるが、少しよ

ろけたのでひかりが支える。

ひかり「大丈夫？」

松田「ああ、すまないが手を貸してくれ」

ひかり「いいよ、さあ、ゆっくり行こう」

ひかり、松田を支えながら歩き出す。

○病院・屋上（夕）

二人、ベンチに座り街全体を見ている。

ひかり「具合はどうなの？」

松田「まずまずかな、時々ひどい頭痛がするのと、少しふらふらするけどね」

ひかり「それってまずまずじゃないでしょ？でも、来週退院して良いんだよね？」

松田「そうだよ、お情けで一時的だけだな」  
ひかり「何かしたい事無いの？」

松田「うーん、そういわれるとなんだらうな」  
ひかり「おじさん、昔社長さんだったの？」

松田「ああ、少し調子に乗りすぎてしまっ  
ね、この様だよ」

ひかり「銀座とかで飲んだりしたの？」

松田「そうだね、馬鹿ばかりして、皆に迷惑をかけたんだ」

ひかり「そうなんだ、そういえばおじさんいない時、職場の人が心配して訪ねて来たよ」

松田「そうか、あれから連絡入れてなかったからな、何か言っていた？」

ひかり「お見舞いでお酒と乾き物持ってきたよ、病人なのに、うけたけど」

松田「そっか、相変わらず間抜けだな」

ひかり「で、どっか行きたい所ないの？」

松田「行きたいところか」

ひかり「思い出の場所とかさあ」

松田「行った事はないけど、昔かみさんとス

カイツリーができたら行こうって、話した

ことあったなあ」

屋上からスカイツリーが小さく見える。

ひかり「なら、退院したら一緒に行こうよ」

松田「そうだな」

ひかり、スカイツリーを指さしながら、

ひかり「あれだよね、私も行ってみたい」

松田「俺からも聞きたい事あるけど良いか？」

ひかり「えっ、私に？」

松田「これからどうするつもりなんだ？」

ひかり「えっ、特に何も考えていないけど」

松田「このままって訳には行かないだろ？」

ひかり「大丈夫だよ、なんとかかなるよ」

松田「ああいう輩はしつこいぞ」

ひかり「おじさんは自分の心配だけしていれ

ばいいのよ」

松田「俺は先がないけど、お前は違うだろ」

ひかり「私も同じだよ、明るい未来なんかないし、でも、だから決めたんだ、おじさんを最後まで見届けるって！」

松田、ひかりを見ている。

ひかりは目を反らし、街を見ている。

○松田のアパート・全景

タクシーがアパートの前に止まる。

ひかりが松田と出て来る。

ひかり「大丈夫？」

松田「ああ、ありがとう」

アパートの中に入って行く。

道路角の脇に新井と門脇が立っている。

○同・部屋の中

松田、壁に寄り掛かっている。

ひかり、お湯を沸かしている。

玄関の扉が強く叩かれる。

新井「松田さん、佐藤ひかりが此処にいる事は分かっているんだぞ、早く開ける！」

ひかり、振り向き松田を見る。

新井「松田さん、未成年者を家に連れ込んで何しているんですか？ 警察呼びますよ！」

松田、立ち上がりひかりを部屋の奥に追いやり、玄関の扉を開ける。

新井と門脇が土足で入り込んでくる。

新井「やっと見つけたよ、お嬢ちゃん！」

門脇、背広の脇から書類を出し、

門脇「ここをよく見ろよ、お母さんが借金一千万円の形にお嬢ちゃんを差し出しているんだ、この文面が見えるだろ！」

ひかり、泣きそうな顔をしている。

ひかり「私は同意していない」

松田「未成年者にそんな事はできないだろ」

新井、松田を突き飛ばして、

門脇「俺ら闇金だぞ、盗れるものから何でも取りつくすのが、生業なんだよ！」

ひかり、涙目で松田に駆け寄る。

ひかり「おじさんは関係ないからやめてよ！」  
新井「お前らできているのか？ てめえを警察に差し出してもいいんだぞ！」

松田、頭を押さえながら、

松田「やめろよ、借金返せばいいんだろ！」

門脇「返せるって言うのか？ 一千万円だぞ」

松田、立ち上がり上着から通帳を出し、  
めくると一千二十万円が入っている。

門脇「えっ、まじかよ」

松田「今から一緒に銀行に行くぞ！」

門脇「なら話が早いぜ、おい、ほら行くぞ」

ひかり、呆然と見ている。

門脇、ひかりをみて、

門脇「良いおじさんに拾ってもらったな」

新井「なんだよ、こいつと一発できると思っ

ていたのに」

門脇、新井の頭を叩いて出て行く。

松田振り返り、ひかりを見て、

松田「直ぐ帰って来るから待ってなさい」

松田、玄関の扉を閉める。

ひかり、立っている。

○A銀行の入口前

松田、銀行の中に入っていく。

○カラオケボックス・部屋の中

門脇、新井が向かいの松田を見ている。

松田、紙袋に入っているお金を渡す。

松田「これであの子は自由だよな？」

新井、紙袋のお金を数えている。

松田「あの子の親が同じ事をして、今後二度とあの子の前に現れるな、いいな！」

門脇、借入書を渡して松田を見る。

門脇「松田さん、即金で返してもらったんだ。

俺らにも仁義はある、二度とあの子の前に現れない、約束は必ず守るよ」

松田、借入書を確認して立ち上がる。

新井、曲をリモコンに入れると、松田を見ながらマイクを取る。

新井「一千万であんな上玉ものに出来たんだ

から、結果安かったんじゃねえの？」

曲が流れ始め、新井が歌いだす。

松田は無視をして部屋から出て行く。

○松田のアパート・全景（夕）

松田具合悪そうに歩いている。

松田玄関の扉を開けて部屋に入る。

○同・部屋の中（夕）

玄関が開くと、ひかり振り向き、

ひかり「おじさん！」

ひかり、笑みを浮かべ松田を見る。

松田、ひかりを見てゆっくり座り込む。

ひかり、松田に駆け寄る。

× ×

窓の外、空に月が出ている。

松田、布団の中で寝ている。

ひかり、心配そうに松田を見ている。

× ×

窓の外、朝日が差し込んでくる。



松田、寝返りを打ち、目を開ける。

ひかり「おじさん！」

松田「ああ、俺は？」

ひかり「帰って来て直ぐ気を失ったのよ！」

松田「そうか」

ひかり「大丈夫？」

松田「ああ、爽快ではないが、悪くないよ」

松田、起きようとするがひかりが体を

押さえて止める。

ひかり「まだ、そのまま寝ていて」

松田「ああ、わかったよ」

ひかり「おじさん、なんて言っているのか分

からないけど、ありがとう、本当に」

松田「気にするな、俺が勝手にやった事だ」

ひかり「おじさん、お金持ちだったの？」

松田「ちがうよ、貯金なんか全くなかったけ

ど、思いがけない金が帰って来て」

ひかり「帰って来た？」

松田「俺の17年が否定された捨て金だ、だ

から気にするな」

ひかり「それって日香里さんへの仕送り？」

松田「えっ、日香里にあったのか？」

ひかり「ごめん、この前会いに行った」

松田「話したのか？」

ひかり「うん」

松田「何してくれているんだよ」

ひかり「何か、おじさんにしなくっちゃって」

松田「気持ちはどうらしいけど」

ひかり「私にできる事は、あと……」

ひかり、上着を脱ごうとする。

松田、起き上がりその手を止める。

松田「何しているんだよ！」

ひかり「だって、私に出来る事って」

松田「もっと、自分を大切にしろよ！」

ひかり「私にそんな価値なんかないよ」

松田「そんな事言うなよ、ひかりの将来はま

だまだの筈だ、これから先に、きっと良い

事がある筈なんだよ！」

ひかり「おじさん、今ひかりっていったよね」

松田「あっ、でかい声でしたら腹が減った」

ひかり、松田を見て、

ひかり「分かった、すぐにご飯炊くね！」

ひかり立ち上がり、流し台で米を研ぐ。

× × ×

松田とひかり食事をしている。

松田「ご飯食べたら、スカイツリー行こうか？」

ひかり「え、これから？」

松田「そう、今頭の中、すっきりしている」

ひかり「本当？ 大丈夫なの？」

松田「ご馳走様、大丈夫だから行くぞ！」

松田のご飯、半分残っている。

ひかり、松田を見る。

### ○スカイツリー・全景

松田とひかりがスカイツリーを見上げている。

### ○同・エレベーター内

松田とひかりが表示の階数見ていると、  
高速で階がどんどん上がって行く。

○同・最上階・展望室内

エレベーターの扉が開き、ひかりがはしゃいで出て来る。

展望室には人が疎らにいる。

松田、ゆっくりひかりについて行く。

展望室から都内の景色が見渡せている。

ひかり「凄い、東京が全部見えるわ」

松田「凄いな、あっちが新宿か」

ひかり「そうだね、あの辺がおじさん家だよ」

松田「で、あの辺りが入院していた病院か」

ひかり「本当だ、見ている方向が違うだけで、

全く違う景色に見えるんだね」

松田がこめかみを押えて座り込む。

ひかり、慌てて松田の処に行く。

ひかり「おじさん、大丈夫？」

松田「ごめん、ちよっとだけ休めば大丈夫だ」

ひかり「顔色悪いよ、やっぱり帰ろうよ」

松田「もう少しだけ、此処に居たい」

ひかり「わかった、もう少しだよ」

ひかりが松田をベンチに座らせる。

松田「東京ってやっぱり広いな」

都内の景色が見えている。

松田「何か暗くなってきたな」

ひかり、涙目で松田を見ている。

ひかり「おじさん、ちゃんと見えている？」

松田、目を凝らし外の景色を見ている。

都内の景色に黒い膜がかかっている。

松田「あれ、何か黒い膜がかかっている」

松田、ひかりの手を握り、

松田「ひかり、今までありがとうな」

ひかり「何それ、まだ一緒に居るんだよ」

松田「そうしたいけど」

ひかり「もっと一緒に居たいよ」

松田「最後に一緒に居られて楽しかったよ」

ひかり「勝手な事言わないでよ、この後、私

はどうすれば良いのよ？」

松田「大丈夫、ひかりの光はきっと見つかる

から、家に帰ったら俺の鞆の中を見るんだ」

ひかり「もう喋らないで、早く帰ろうよ」

松田、意識を無くして倒れる。

ひかり「おじさん、しっかりして！」

ひかり泣きながら、松田を抱きしめる。

ひかり「誰か、救急車を呼んで、お願い！」

スタッフが松田のところに駆け寄る。

青い空に赤い夕日が沈んで行く。

○松田のアパート前・全景

亜希子と日香里が立っている。

日香里「あの人、こんな所にいたの？」

亜希子「そうだね、送られてきたはがきの住所、此処だから」

○同・部屋の中

食卓に松田の遺影が置いてある。

ひかりが鞆の中を見ると宝くじがあり、番号を確認するが外れている。

ひかり「ふっ、相変わらず、ついて無いね」

その脇に、ひかり宛の封筒と、死亡保険金300万円の保険証券がある。

保険の受取人は日香里になっている。

玄関扉がノックされ、ひかり振り返る。

○南の島・白い砂浜の海岸・全景

青空、強い日差し、海を照らしている。  
金谷、砂浜の上のベッドで寝ている。

○公園・全景（朝）

ひかり歩いていると、遊んでいる亜希  
子と麗に気づき手を振る。

ひかりの声「松田さんのおかげで、私の人生  
は180度変わったよ」

○同・並木道・全景（朝）

ひかり、並木道を歩いている。

ひかりの声「亜希子さんが松田さんの遺書を  
読んで保険金の受取人を私にしてくれたの」

日香里が、後ろからひかりに抱きつく。

日香里「おはよう！今日も勉強がんばろうね」

ひかり「うん！」

ひかりの声「日香里とも友達になれたよ」

二人、談笑しながら歩いている。

○図書館・館内（夕）

ひかりが高卒認定問題集を解いている。

ひかりの声「亜希子さんは私の将来を考えて、

近所にアパートまで借りてくれたの」

日香里が横で問題の説明をしているが、

夕日が眩しく、ひかりが窓の外を見る。

ひかりの声「私、もう一度頑張って生きてみるからね」

青い空に、赤い夕日が沈んで行く。

ひかりの声「私、あの日一緒に見たあの空は絶対に忘れないよ！」

二人、茜色の夕日の空を見ている。

遠くにスカイツリーが小さく見える。

ひかりの声「だから、いつまでも、ねっ！」

《完》